

Children's ability of observation and expression fostered by experiencing nature and negative effects of adults' inadequate models and samples on children

WATANABE Kanae

Abstract

After observing real fish and shellfish in nature, children drew vivid and creative pictures. On the other hand, licensed caregivers who lacked nature experience drew iconic and/or cartoon-fashion pictures of fish and marine creatures. These adults' pictures were quite different from the real animals. Sometimes, adults fear that they do not have enough knowledge of nature and they cannot teach anything about nature to children and give iconic, stereotyped and/or in cartoon-fashion samples to children innocently or meaning it for the best. However, it is warned that teachers' giving stereotyped iconic sample pictures to children robs those children of their creativity and originality. Such inadequate samples have serious negative effects on children's ability of observation and expression. The most important things that adults should do to nourish children through nature activities are to enjoy nature with children and to love creatures in nature with children.

自然体験活動が育む 子どもの観察力・表現力に、 大人の見本・手本が及ぼす悪影響

渡 部 か な え

1. 緒言

子ども時代は豊かな情緒や感受性を耕す時であり、自然と出会って、幼い心に焼きつけられていく素晴らしい記憶は、やがて知識や知恵を生みだす種子となり、子ども達の人間性を育てていく¹⁾。自然や生き物の原体験(proto-experience)は、その後の事物・事象の認識に影響を及ぼす²⁾が、脳神経系の発育・発達の特性から、幼少時期が原体験の至適時期と言われている³⁾。

幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領および保育所保育指針⁴⁾に記載されている保育5領域の中の「環境」には、「自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議などに気付く」こと等が内容として記載されており、保育者は子どもの自然体験を通してそれらの育ちを支援していく。しかし保育者自身の自然体験活動が不足しているため⁵⁾、無意識にあるいは良かれと思って行う保育が不適切で逆効果になる場合がある。

本研究は、子どもの自然観察力とそれを描画する表現力に大人が不用意に描いてみせる見本・手本が及ぼす悪影響を検証し、自然体験活動を通しての子どもの育ちへの適切な支援とはどのようなものであるべきかを検討

することを目的として行った。

2. 方法

見たこと、感じたこと、考えたことを、年長の子どもは言葉や文章で表現できるが、言語機能の発達がまだ十分でない幼児には、絵を描くことが表現・伝達の重要な手段である。子どもが海辺の自然体験活動で出会い、活動後に描いた魚の絵と、保育者が見本・手本として描いた海の生きものの絵、そして先行研究の教師が与えた類型的な手本・見本が子どもの描画に与えた影響の事例⁶⁾を、質的研究手法⁷⁾を用いて比較・検討した。

対象児は4歳（当時）で、4月と5月の海辺の複数の親子を対象とした海辺の自然体験活動の最後に、その日の活動の振り返りとして絵を描いた。子ども達は平仮名を読むことができたので、クレヨンとA3サイズの用紙を与え、描画の指示は用紙に「えにつき なにがたのしかった？」とだけ記載して、何をどのように描くかは子どもの自由に任せ、指導者や保護者が描いて見せたり言葉で誘導したりすることができないようにした。保育者（幼稚園教諭と保育士の免許・資格を保持）は、対象児が通っていた幼稚園とは無関係で、対象児との接触はない2名であった。この2名に対し、4月（対象児が体験活動と描画をしたのとは別の機会）に、「子どもに、海の生きものの絵を描いてあげてください」と依頼し、対象児が描画に用いたのと同じクレヨンで、同じ大きさの紙に自由に描いて貰った。

なお、子どもの絵の発達には個人差が大きく、同年齢でも様々な発達段階の子があり、また海辺の自然体験活動で見たもの、感じたことは子どもによって異なる。本研究の対象児は、4歳児としてはかなり描画力が高く、絵の発達段階⁸⁾は、同年齢の子どもが描く絵は線や丸、その他いろいろな形を用いて自分のイメージを象徴的に表現しようとする「象徴期」（おお

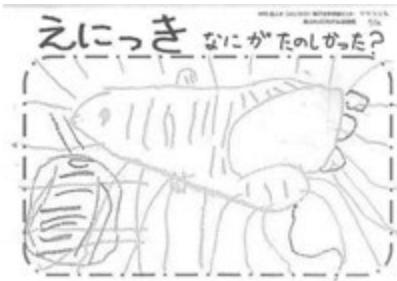


図1 子どもの絵①

図2 子どもの絵②
(渡部、海野 2014)⁹⁾

むね2歳から4歳)のものが多いが、対象児の絵は他の人にも何が描いてあるかわかる「図式期」(おおむね5歳から8歳)に入っていた。

3. 結果

図1と図2⁹⁾は対象児が夏前と初夏の活動の最後に、その日に出会った海の生きものを描いた絵である。図1はアンコウ(絵の右側が大きく開いた口、左側が尾部)が黄色いクレヨンで画面いっぱいに描かれ、左下にヒザラガイ(岩に張り付いている平貝)が深緑色のクレヨンで描かれている。図2⁹⁾は、引き潮の時に磯の潮だまりに取り残された魚(未確認であるが、ハオコゼと思われる)を赤いクレヨンで画面中央に大きく描き、左に自分を、右に一緒に魚を見た母親を描いている。

図3と図4は保育者が描いた「海の生きもの」の絵である。どちらもかわいらしく描かれているが、生きものがマンガチックにアイコン化されていて、実際の形や生態とはかけ離れてしまっている。図3のタコもイカも足が4本しかなく、ウミガメには尾がない。海面上に体のほとんどを出している画面右上の生きものはクジラと思われるが、クジラはこのような浮環のような浮き方はしない。体長と尾長の割合や体に対する目の大きさな



図3 保育者の絵①

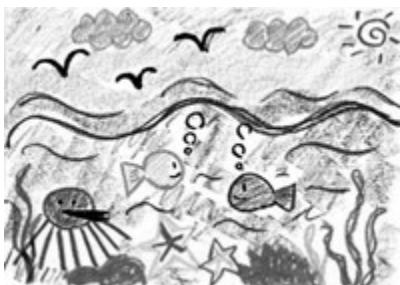


図4 保育者の絵②

ども、実物のクジラの形状とは大きく異なる。そして図3も図4も、タコの腹部が頭部になっている（腹部に目や口が描かれている）。また、魚には尾鰭しかなく（背鰭、腹鰭、胸鰭がない）、色や形から魚の種類をることはできない。さらに、魚は鰓呼吸にもかかわらず空気（呼気）を吐いている。

ローウェンフェルドは、自分の経験から動機づけられた鳥の絵（図5のa）を描いていた子どもが、教師によってサンプル画（図5のb）を写す課題をやらされた後、図5のcのような鳥の絵しか描かなくなってしまったという事例を報告している。型にはまつた類型的な見本・手本の影響は、子どもから考える力を奪い、描きたいものを自由に描けなくさせてしまふ⁶⁾。

4. 考察

子どもは、海辺の生きもの達との出会いにワクワクして興味関心を持ったこと、だからこそ全体像をしっかり把握した上で細部までよく観察していたことが絵から読み取れる。図1がアンコウであることは指導者のメモ

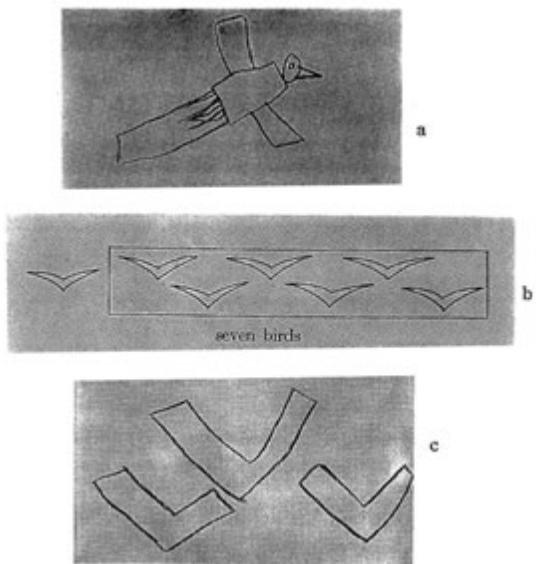


図 6 型にはまつた類型的な手本の悪影響
(ローウェンフェルド 1995) ⁶⁾

から確認できたが、ヒザラガイのことは指導者のメモには記載されていない。しかし描かれた絵からヒザラガイであることがわかる。また図2⁹⁾の魚も指導者はメモしていないが、葉山海岸の潮だまりで観察される可能性がある魚の中で、色と形からハオコゼと推察することができる。

保育者（幼稚園教諭と保育士の免許・資格所持）2名の海の生きものの絵は、目や口が細く弓なりになったマンガチックな笑っている顔や、きれいな色でおもちゃのような形の魚やタコ、ウミガメなどを描いているが、生きものたちの実際の姿形とはかなり異なる。また、描かれた生態も現実にはあり得ない。「子ども達が親しみを持てるようかわいくしよう」という気持ちで描いたと思われるが、自然の中で実際に生命活動をしている生きもの達を見た経験がないので、メディアやアニメーション、イラストな

どで見たアイコン化、マンガ化された表現をまねることになったと推察される。

保育者は、子どもの感性を大切にすること、型にはめたり誘導したりしてはいけないことをよくわかっているはずであるが、自然の海で生きている魚を自分自身の目で見た体験がないため、無意識にあるいは良かれと思って、生きものをアイコン的、マンガチックに描いたと考えられる。しかし、そのような絵を見本・手本として子どもに見せることが子どもの観察力や表現力を奪う危険性に保育者自身が全く気付いていないということは、保育者が生きものの本当の姿形や生態を知らないということ以上に、子どもに深刻な悪影響を及ぼすことが懸念される。

子どもに寄り添う大人がやるべきことは、自然の神秘を子どもと一緒に再発見することであり、喜びや感動を子どもと共有すること¹⁾であって、大人の思い込みや固定観念を子どもに刷り込むことではない。

子どもにこそ本物を体験することが重要¹⁰⁾であることを知識としては持っていても、自然体験活動の経験が不足している大人は「自分は子どもに何も教えてやることができない」のを恐れる。けれど、「知ることは感じることの半分も重要ではない」¹¹⁾。大人が、子どもと一緒に自然体験を楽しみ、子どもと一緒に自然の生きものを好きになること、すなわち自然と触れ合う喜びや感動を子どもと共有することが、自然体験活動を通しての子どもの観察力・表現力の育ちへの適切な支援であると結論づけることができる。

5. 謝辞

本研究は、NPO 法人オーシャン・ファミリー海洋自然体験センター（オーシャン・ファミリー：海野義明代表）の協力・支援を得て行った。

また、本研究は上記オーシャン・ファミリーが2012～2013年に日本財団から支援を受けた事業「未就学児の海辺の自然体験活動の教育的及び医学的な検討と指導法の構築」に筆者も参画して得られた知見の一部である。描いた絵を提供してくれた子どもとそれに同意してくださった保護者、海の生きものの絵を描いて研究に協力してくださった保育者の方々に感謝いたします。

参考文献

- 1) Carson Rachel, (1998) *The Sense of Wonder*, Harper Collins Publishers, New York, 111p.
- 2) 山田卓三 (1992) *生物学からみた子育て*, 裳華房, 東京, 138p.
- 3) 体験活動と指導のあり方に関する調査研究委員会 (2004) *少年・少女が一人前になるための体験活動*, 国立信州高遠少年の自然の家, pp. 44-101.
- 4) 内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2014) *幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領 保育所保育指針* (原本), チャイルド社, 東京, 87p.
- 5) 井上美智子 (2008) *自然とのかかわりの観点からみた現職保育者研修の実施実態*, 教育福祉研究, 34, pp. 1-6.
- 6) ローエンフェルド V. 著, 竹内清, 堀ノ内敏, 武井勝雄 訳 (1995) *美術における人間形成*, 黎明書房, 名古屋, 653p.
- 7) 遠藤俊彦 (2007) *はじめての質的研究法 生涯発達編*, 秋田喜代美, 能智正博 監修, 東京図書, 東京, pp. 10-20.
- 8) 東山明, 東山直美 (1999) *子どもの絵は何を語るか*, NHK ブックス, 日本放送出版協会, 東京, 214p.
- 9) 渡部かなえ, 海野義明 (2014) *海辺の自然体験活動後に子どもが描いた絵の質的分析*, 海洋人間学 vol. 3, No. 1, pp. 17-23.
- 10) 浅見均 (2010) *幼児期の家庭教育について*, 日本教材文化研究財団 研究紀要第39号, pp. 93-99.